

ライフセーバー／遊佐雅美さん

時流 かながわ (自)流 この人が語る

# 海の安全問い直す



は3・11以降、あらためて

海の安全とは何だろう。穏やかに広がる相模湾を見つめながら、その思いが奇せては返している。

全日本ライフセービング選手権ビーチフラッグス競技で17連覇し、4度世界チャンピオンに輝いた。海岸の安全を守り始めてから今年で20年目の夏を迎える。海岸の危険や波の力を誰よりも知るライフセーバー

「人の命」や「自然の脅威」について考えていた。

今夏も警戒の任に就く藤沢市片瀬海岸は全国有数の海水浴場。最盛期には数万人の海水浴客が海岸を埋め尽くす。

「いざ大津波が到来するという状況になったら、できることは限られている」。それが現実ではある。「ただ、ライフセーバーの使命は、まず『未然に防ぐ』こと。この考えからすれば、例えば一番近い高台を把握し、事前に海水浴客へ伝えておくことはできる」

ホームグラウンドの片瀬東浜海水浴場は、内陸側へ走って5分ほどの距離に海拔10メートルを超える高台があ

る。

津波被害想定の見直しが全国で進む。昨年よりも1年たったこの夏のほうが、対策が数字や地図を伴って具体的になっているのを感じる。

「あらためて仲間と避難経路と場所を確認し合った。全国的にその動きは広がっている。行ったことのない海に入るときは、どこに一番近い高台があるのか、そのビーチのライフセーバーに聞いてもらいたい」

震災直後の混乱が収束し始めた2011年4月下旬。被災地の岩手県山田町へ向かい、1週間ほど行方不明者の捜索に当たった。

街は全壊し、3階建てのビルの上に漁船が乗っていた。「テレビで見て分かったつもりになっていたが、想像とはまったく違っていた」。圧倒的な力、自然の脅威を見せつけられた。

ドライブスーツに身を包み、漁船に乗り沖へ出て、海中へ潜る。カキやホタテの養殖いかだに引つ掛かった瓦礫の中に、被災者の亡骸もあった。

「本当に想像を絶する状況。言葉も出なかった」。人の命のはかなさ。自然の荒々しさ。生きること、そして死ぬこと。思いをはせずにはいられない。

それでも、海への愛情は変わらない。「海や自然の豊かさは何ものにも替え難い。スポーツだけでなく、海辺で本を読んだり、音楽を聴くだけでも穏やかな気持ちになれる」

いま、ビーチに人が親しむ環境づくりに取り組んで

ゆさ・まさみ 日本ビーチ文化振興協会理事。日本ライフセービング協会競技強化委員ビーチ部門コーチ。藤沢市の「西浜サーフライフセービングクラブ」所属。1993年から全日本選手権ビーチフラッグス競技で17連覇、18度の優勝。世界大会で4度の優勝。今夏19回目の日本一を目指す。川崎市出身。38歳。

いる。子ども向けに海辺の安全を教える講習を開き、楽しみ方や、危険なことを伝えている。

波や潮の流れによって、岸から沖へ向かう流れ「離岸流」が発生すること。波打ち際に突然深く掘れた場所「インシヨアホール」ができ、そこへ足を踏み入れると波にさらわれることがある。

「実際に体験したり、見聞きすることで安全に楽しめる。正しい知識を持ってもらうことが一番重要」と思いを込める。

それは、津波も同じこと。「津波が来たら高台へ逃げる。地震でも洪水でも、例えば、避難用具を用意しておいたり、家族と落ち合う場所を確認し合っておいた

り、事前の用意と知識が命を守る」

片瀬海岸海水浴場に日本で初めてライフセーバーが配置され、今年で50年目を迎える。ここ数年同海岸で重大事故は発生していない。

事故を未然に防ぐには、海水浴客とのコミュニケーションが欠かせない。震災であらためて気づかされた原点でもある。「どこかで離岸流が発生しているとか、波の高さはこれくらいとか、ライフセーバーが発信することが事故防止になる」

3・11を経て、海の安全を見つめ直す夏。海岸を熟知するライフセーバーもまた、無事故への思いを新たにしている。

スポーツイベントなどを展開。ビーチバレーのプロ選手やプロライフセーバーらによる講演なども開催し、ビーチ文化の普及に取り組んでいる。

◆日本ビーチ文化振興協会 2004年4月設立。ビーチの活動拠点整備や活性化のほか、はだして遊べる海岸を目指し、ごみ拾いイベントや、海辺の安全教室、

## 「事前の用意と知識が命を守る」